

2026年6月21日 沖縄を覚えて

説教題『神の国の福音を生きる』ヨハネ 16 章 33 節～信仰って、なに？シリーズ③～

主任牧師 加藤 誠

「これらのことを話したのは、あなたがたがわたしによって平和を得るためである。あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている。」(ヨハネ16章33節)

日本バプテスト女性連合は約 20 年前から 6 月 23 日を「命（ぬち）どう宝の日」として覚えて平和学習ツアーを開催し、沖縄連盟の女性たちと一緒に沖縄戦の歴史を心に刻み、平和を祈るときを重ねてきています。なぜ沖縄なのでしょう。一つは、かつての戦争で日本は「捨て石」の役割を沖縄に押し付け、二十万人以上もの命の犠牲を強いたこと。もう一つは、今なお日本の米軍基地の七割以上を沖縄に押し付けていること。そのように、かつての戦争の愚かさと悲惨、私たちの過ちを深い反省をもって心に刻むと同時に、今の私たちが自分自身の問題として考えるべきことが沖縄に示されているからです。平和の課題を考えることは自分が問われるキツイことです。でもキツイから背を向けるのではなく、キツイから聖書を開いていきたいのです。

さて先日から「信仰って何」というシリーズで聖書を開いています。信仰とは神の愛の呼びかけを受け取ることであり、信仰とは私たちが「主よ、神さま」と祈り始めることを、二回に分けて聞いて来しました。今日はその三回目です。マルコ福音書は冒頭で「神の福音を宣べ伝えた主イエス」を紹介しています。「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」と。「近づいた」とは「手を伸ばせばさわれるほど近くに神の国は来ている！」という意味です。「その神の国の福音を受け取り、新しい生き方を始めていこう！」と主イエスは呼びかけ、「わたしに従ってきなさい」と弟子たちを招かれました。ですから主イエスを信じる信仰とは、主イエスの招きに応えて、この世界にあって神の国の福音を生きていくことに他なりません。

その神の国はどういう国なのでしょう。人間の王国では、王様が真ん中で威張り、人々が王様の前にひれ伏しますが、神の国は、愛の神が真ん中におられて、神の優しさ、喜び、平和、勇気、希望が分かち合われていく国です。例えば最後の主の晩餐が神の国のイメージを良く教えてくれています。主イエスが食卓の主人で、弟子たちは招かれた人々ですが、その弟子たちに主は「わたしを取って食べよ」「わたしを飲みなさい」とご自分の命を差し出します。さらに弟子たちの足もとに跪いて、一人ひとりの汚れを丁寧に洗ってくださいます。神の国の主人は、食卓の一人ひとりを大切に覚えて、小さく低い姿で神の愛と赦しをあらわされる方です。そして招かれた人々は「わたしがあなたがたの足を洗ったように、あなたがたも互いに足を洗い合いなさい」と、新しい生き方に招かれる。それが主イエスが教えてくださった神の国です。

その神の国の食卓には、当時の社会で「触れたら汚れる！」と排除されていた人たち、「お前は足手まといだ！」と大人から叱りとばされている小さな子どもたちが招

かれていることを主イエスは示されました。そして、弟子たちの真ん中に小さな子どもを立たせて、「神の国はこのような者たちの国だ。子どものように神の国を受け入れる人でなければ決してそこに入れない！」と弟子たちを厳しく諭されたのです。

神の国にはみんなが招かれていて、誰でも入れる国です。しかし、自分が大きいと思っている人、小さくなることを嫌がる人は入れない。「あいつの顔は見たくない！」と、自分の「敵」と一緒に食卓を囲むことを嫌がる人も入ることができません。

茶道を確立した千利休は茶室の入り口を「躰り口（にじりぐち）」と呼びました。高さ 67 センチ（2 尺 2 寸）、幅 64 センチ（2 尺 1 寸）の小さな入り口です。身をかがめ、膝をにじらせて入ることから名付けられました。当時は戦国時代でしたが、茶室の中では武士も町人も平等であり、互いを尊重し合う空間であるという理念があらわされているそうです。入り口で頭を下げる。腰に帯びている刀を置く。謙遜にならないと中には入れないのです。まさに主イエスの神の国と同じ思想がそこにあります。

しかし、現実の世界でこの神の国の福音を生きようとするといろいろと衝突せざるをえません。今の世界は「俺が一番偉い」と威張っている人がリーダーになり、富や武力を持つ人の我儘が付度されていて、神の国とは真逆の価値観が支配しているからです。主イエスが生きられたユダヤでも、主イエスは時の権力者に疎まれ、憎悪され、十字架に追いやられました。この世界で神の国を生きる、神の国の福音、神の国の平和を生きようすると、厳しい衝突を避けることはできないのです。

沖縄の伊江島の一農民として生きられた阿波根昌鴻さんというクリスチャンがおられます。阿波根さんは米軍基地の拡大に対して非暴力で穏やかに、しかし強い意志をもって戦い続けられました。阿波根さんは米軍の将校に尋ねました。「どうして沖縄の農民だけが基地の犠牲を強いられるのですか？キリストは 99 匹を野において 1 匹の羊を大切にされたではないですか？」。将校は答えます。「現実の世界では 99 匹のために 1 匹には我慢してもらわないとならないのだ」。1 匹を大切にする神の国の価値観と 99 匹を選ぶ現実の世界の価値観は衝突せざるを得ない。その闘いを、主イエスに従う信仰者はどう生きるのでしょうか。それは大きな困難が伴う闘いです。

その闘いを前についつい及び腰になりがちな私たちに、主イエスははっきりと言われました。「あなたがたは世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝っている」と。主イエスは 99 匹を選ぶ現実の世界にすでに勝利されている。もちろんその勝利はいわゆる武力で相手を打ち負かすような勝利ではありません。どういう勝利か。私たち人間の悪がどれだけの闇であろうとも、その底知れぬ闇の中から私たちを救い出すためにご自分の命を差し出し、決してあきらめずに祈り続ける勝利です。主イエスがあきらめずに祈り続けておられる以上、私たちもまた「御心の天になるごとく、地の上になること」を祈り続けたいのです。「武力に頼るほかない」という現実には勝利するたった一つの方法があります。それは「あきらめない祈り」です。その「あきらめない祈り」を学び続けていく。それが主イエスに従う信仰です。